

かがり火

岐阜県生活指導研究協議会

会員通信

2003年 1～3月号 No.1 1 3

会長：加藤久雄 / 事務局：河田秀明

編集部：上村文隆

「なんで俺ばっか叱るんよ！」の実践分析その後

甘え・わがまま論争への誘い

「かがり火」No.112の実践分析(総括)をめぐる面白い論争となりました。以下紹介します。

その① 私は、彼とはまだ本当に出会っていない

飛騨サークル 中島一英

「実践分析」ありがとうございました。こんなに丁寧に総括していただいて本当に嬉しいです。田中先生の分析を読んで感想を一言で言えば、「担任の私以上に彼(平野君)のことをよく分かっているんじゃないか？」

ということと「私は、彼とはまだ本当に出会っていないな。」ということです。

まず、「平野君とはどういう子か」ということですが、これは未だに私自身も充分分析できていません。小学校の先生からの情報は学校でこんな問題を起こしたということばかりで、その原因がつかみ切れません。本人は語ろうとしませんし、父母も多々を語ってくれません。なぜ、こんなに、人の揚げ足をとる発言や、人の感情を逆撫でするような発言を繰り返し、聞えよがしの皮肉を言い続けるのか、まだ見えて来ないのです。

そして、私の指導も中途半端で彼に届きません。彼の内なる声に耳を傾けようとするものの、彼の態度を、生意気で横柄だと感じてしまい、つきつく注意したり指導したりしてしまいます。学年の先生の「1年生のうちにはガツンとやっておかないと2、3年生になってからでは遅い。」「小学校とは違うってことを徹底的に教えんといかん。」という声も耳に入ってきます。

だから、指導が甘いと思われたくない気持ちだが、彼への指導にも出てしまうのでしょうか。だから、彼にとつて私は「支配」と「抑圧」に感じられるのでしょうか。そして、拒絶的で反抗的な彼に、どう迫って良いか方針が立たず、彼に迫りることができません。呼んで話を聞こうとしても、心を開き、耳を傾けようとはしません。当然対話も成立しません。

田中先生の分析の中で、田中先生ならこう指導するだろうと言う部分があり、大変参考になりました。特に、英語の教師に対する、担任としての問い返し。そして、乗鞍研修で、キレルと思ったのにキレなかった彼への

問い返し。そして、仮想の彼と対話すること。

合宿研での実践分析を受けて、私も彼への対応を少し変えた部分もあります。例えば、終わりの会で、ある生徒の発言に対して、彼が揚げ足を取るような発言をしたとき、「おっ、ちゃんと人の話を聞いてったから、反応できたんやな。でも、その言い方は、失礼だから直した方がいいぞ。」などと対応するようにしています。

しかし、いつもそういうときばかりではありません。同じく終わりの会で、係からの連絡のとき、

係の女子 「置き勉強する人が多いので、しっかり持ち帰って学習してください。」

平野君 「バッグがいっぱいで入らんのやさ。やし、どうせ家へ帰っても勉強せんのやで意味ないし。」

私 「何か言いたいことがあるなら、ちゃんと手を挙げて言いなさい。」

平野君(右手を挙げたままで)「手を挙げればなにしゃべってもいいんやぞ。日直も、手を挙げて司会しろ！」
こんな調子です。

そして、2学期に入り、彼を中心にした男子のある女子へのいじめ、授業中の暴力、彼の嫌がらせによるある男子の不登校、伴奏拒否 etc. 事件が続発しました。詳細は、次回書きます。

「かがり火」No.1 1 2 「秋の合宿研究総括」について

「わがまま」をせざるをえないのはなぜかと問うことこそ！

飛騨サークル 桂川 清

総括の2の①「平野君とは、どんな子か。子ども分析」の中で、管理と戦うために、子どもを事ある毎に分析していく必要があると述べられた後で、子どもの問題行動について以下のように書かれています。

(1)「子どもの示す問題が甘えからくる単なるわがままや、謙虚さのなさ、生意気盛りの横柄さや傲慢さから来ている場合もあり、だからこそ教師や親が断固として壁になって叱ったり要求すべき場合もある。そのような場合には、教師は子どもの甘え掛かりを安易に認めてはならないだろう。・・・(中略)」そして、

(2)「逆に子どもの示す問題の背景に、子どものヘルプ(救済)が示されている場合がある・・・。(以下略)」と続きます。(1)(2)は桂川による)

(2)の場合については、まさにその通りと思うのですが、(1)の場合について少し疑問に感じた所を書きます。それは、子どもの「わがまま」という問題を「甘えからくる」ととらえ、それに対して「教師や親が断固として壁になって叱ったり・・・」という方針を立てていることです。(もちろん、そういう場合があるということですが・・・。)

その書き方では、「子どもたちは、甘えからわがままをしているのだから、「厳しい指導」をしなけれはいけない。」という、よく言われている管理主義的な指導との区別がつきにくいのではないかという懸念を持つのです。

小学校低学年の実践(そればかりではないと思いますが)をしていると、先のような「厳しい指導」を肯定する意見があります。それは、「甘えからわがままをしている。(それでは、自立できない。)」という精神主義的、管理主義的とらえにたち、その甘えを厳しく排除すればよいとする指導につながっていきます。

そこには、子どものわがままだ甘えがあるから、という短絡的なとらえがあるだけで、わがままだせざるをえないのはなぜかという関係性の視点や発達課題の獲得の視点?にたった分析がありません。私たちが重視しているのは、そうした分析の視点です。それがなく、精神主義的、管理主義的な指導に陥ってしまうのでしょう。

そう考えると、視点を明確にした書き方がよいのではないのでしょうか。

「子どもがそうした言動をとっていることを、関係性の視点や発達課題の獲得の視点?で分析していくと、子どもがわがままだしているのは、以下のような場合が考えられる。・・・。そして、そうとらえると・・・のよ

うな指導方針が成り立つ。」 以上ご検討ください。

子どもには叱ってもらう権利がある。

大人は「わがまま」を指摘・叱らないと、子どもに出会えない

西濃サークル 田中秀樹

もともと子どもは「わがまま」な存在であるから、それをすべて大人が拒否したら子どもは生きていけないことははっきりしている。子ども自身も自分でやっていることが「わがまま」で、周囲との関係に置いて自分と他者を置き換えてみて、「このわがままだよ、よくないな、認められないな」ということは、中学生くらいになると、うすうす分かっていてもやってしまうということがあると思うのです。そんな時に周囲の大人がそれに対して「わがままだよ、そう思わないか？」と反応してやらないと、子どもはおかしくなる、自分の中の価値観が形成できなくなる。だから大人が意図的に壁になってやることは場合によっては必要だと私は考えています。「厳しい指導」も管理ではあっても管理主義とは限りません。

私の説明が不足だったのでしょう。桂川氏の言う、「関係性の視点や発達課題の獲得の視点」による分析は当然必要でしょう。しかしその上で子どものわがままだよを指摘してやることも必要である、叱ってやることも場合によって必要であると思います。いや、そのような実践報告が私も含めて少なすぎると思うのです。子どもの権利条約では、「叱ってもらう」つまり自分のわがままだよを指摘してもらうことも子どもの権利なのですよ。だからやはり子どもの行為の分析が必要なのですね。

しかし逆に言えば分析を深読みしすぎても教育の指導はタイムリーなものでなくなります。私の書き方が誤解を招きやすいものであったことはそうだと思います。しかし特に思春期の中学生を意識した場合に、それは子どもの「わがままだよ」を指摘したり叱ったりすることを躊躇するあまり、教師や大人が子どもの壁になれない、結果として出会えないまま支配的な他者にすんなれないという事態があると思うからです。もちろん管理主義的な方法も困りますが。

「わがままだよ」だから「厳しい指導」を、となるのでは

飛騨サークル 桂川 清

私のイメージした子どもたちの「わがままだよ」な状況とその分析及び方針というのは以下のようなことです。

例えば、単純化しすぎているかもしれませんが、子どもの「問題」行動を現象的に見ると、①「否定的な言動（暴力・暴言、すねるなど）で表す」、②「身体的な不調を訴える」、③「よい子を演じる」のようになります。

こうした子どもたち（①、②）は、一般的に「わがままだよ」な子どもとされます。そして、そうした子どもたちを、経験主義的、精神主義的、管理主義的にとらえると、「甘えている。」というような分析になります。（一般的には、意識的に分析してないのだろうと思いますが）それで、方針を立てると、（これも、意識してはいないのかもしれませんが）甘やかしては、そうした言動を助長させるだけだ。だから、「厳しい指導」をしてやめさせなければいけない、と甘えている個人の責任に帰してしまう（＝個人還元主義）ような方針、指導になるのだと思います。

逆に、そうした「わがままだよ」な行動を関係性の視点でとらえると以下のように分析できます。他者との関係の中で、信頼関係が結ばず、自己否定的な言動で表すのではないか、他者との関係の中で、自分の要求をうまく表現できず、そうした言動として表さざるをえないのではないかなど。そして、そうとらえて方針を立てると、子

どもと他者との関係をどうつくりだしていくのかとなり、関係性の方針、指導になるのだと思います。（田中先生が研究総括の2-①-②）で書いてみえたように）

さて、先生の文章を引用しつつ考えてみたいと思います。

『子ども自身も自分でやっていることが「わがまま」で、周囲との関係において自分を他者と置き換えてみて、「このわがままはよくないな、認められないな」ということは、中学生ぐらいになると、うすうす分かっていてもわかっていてもやってしまうということがあると思うのです。そんなときに周囲の大人がそれに対して「わがままだよ、そう思わないか？」と反応してやらないと、子どもはおかしくなる、自分の中の価値観が形成できなくなる。だから、大人が意図的に壁になってやることは場合によっては必要』とのこと。

それを少し書き換えてみます。子どもの「わがまま」を分析すると、他者との関係の中で、他者に対してよくないと思いつつやってしまう場合がある。（分析）そうとらえると、大人が意図的に壁になってやる必要がある。（方針）そのように書くとき経験主義的、精神主義的、管理主義的なとらえとの区別がはっきりして分かりやすい（私だけかも）のではないかと思うのです。

先生が「特に思春期の中学生を意識した場合に、それは子どもの「わがまま」を指摘したり叱ったりすることを躊躇するあまり、・・・事態があると思うからです。もちろん管理主義的な方法も困りますが。」と書いてみるような問題意識があって、そうした総括文になったということは、なるほどと思いました。

私のこだわりは、前にも書きましたが、関係性の視点による分析を、経験主義的、精神主義的、管理主義的なとらえと意識的に区別し、文章化していくことが大切になるのではないかということです。

先生のお考えとどう関わるか分かりませんが、ご検討ください。

「わがまま」と「子どもの権利条約」

岐阜サークル 河田秀明

桂川さんと、秀樹さんの論議、楽しく拝見しました。ML上で、こういう論議があるのは久しぶりですが、やはりこういう論議は良いですね。さて、二人の論議で気になる点があるので、私も少し意見を述べます。

（１）「わがまま」について

「わがまま」は、他者（集団）に対しての甘えかかりであり、依存関係を基本にしている行為ですよ。それは、基本的には「受容」を求めている行為だといえるでしょう。ですから、受容されそうにない相手には「わがまま」を通しません。警察官に「わがまま」や「甘え」を通そうとする人はいないでしょう。だとすれば、「わがまま」を出せるという関係は、肯定的に見る必要があるのではないのでしょうか。それを毅然として拒否してしまうことは、関係性を喪失する危険があります。何年か前の黒磯中学校の女教師刺殺事件（授業に遅刻してきた男子生徒に毅然とした態度で指導して、ナイフで刺し殺された）を例としてあげることができるでしょう。

ですから、「わがまま」には「受容」を基本として接するべきだと思います。これは、小学生、中学生も同じですし、大人だってそうでしょう。教師だって「わがまま」をいうことが多くありますよ。「あの学級（学年）だけは、担任したくない」と公然と担任拒否をする先生がいませんか？休むほどの熱でもないけれど、休みたいと思うことがあるでしょう。そういう時に、管理職や同僚から「それは、わがままだ」とか「甘えるな」と毅然とした態度で否定されたら、つらいのではないのでしょうか。

しかし、すべての「わがまま」を受容するものではありません。「わがまま」にある何を受容し、何を拒否するのかを区別する必要があると思います。結論的にいえば、相手の「人格（存在）」は受容し、不正（義）である行為については、否定するということでしょう。「厳しい指導」というのは、この区別がないがために、

体罰や脅しといった相手の人格（存在）をも否定することになりがちなのです。

(2) 子ども権利条約について

秀樹さんが、子どもの権利条約を引用して「叱ってもらうことも子どもの権利である」と書いていることに対しては、異論があります。子どもの権利条約のどこにそんな権利が書かれているのでしょうか。子どもの権利条約の中核は、「子どもの意見表明権」です。

この「意見」には、言語による表明だけでなく、泣く、暴れる・・・など、子どもの行為すべてが「意見」と解釈されています（これには異論があるかもしれません）。つまり、赤ちゃんの「オギャー、オギャー」という泣き声も、赤ちゃんの意見表明だといえます。この解釈に立てば、言葉を発することもできない幼児を含めて、すべての子どもに意見表明権が認められるのです。そして、大切なのは、こうした子どもの意見表明に対して、大人は誠実にレスポンスする（応答する）義務があるということです。ここで注意すべきことがあって、このレスポンスというのは、意見表明した子ども自身が納得できてはじめて、レスポンスしたことになるのです。ですから、子どもの意見表明に対して「うるさい!」とか「何を言ってるのだ」と、意見を拒否するような言動は、レスポンスしたことになりません。

ですから、秀樹さんの言っている「叱ってもらうことも権利だ」という解釈は、誤解を生む危険性があるので注意を要します。以上、私の感想を書きましたが、この論議が続くことを期待しています。

飛騨サークルの青木です。河田先生に質問ですが、

>すべての「わがまま」を受容するものではありません。「わがまま」にある何を受容し、何を拒否するのかを>区別する必要があると思います。結論的にいえば、相手の「人格（存在）」は受容し、不正（義）である行為に>については、否定するということでしょう。

・・・これを、具体的にするとどういうことになるのでしょうか？わがままと感じられる子どもを指導するとき、話を聞いただけきいて、「気持ちはわかるけど、あなただけにそれを許すことはできない。」とか、「あなたの行為は、やってはいけないことなんだよ。」と言うのでしょうか？

状況の設定がされていないので、具体的な言葉にしていくことはできませんが、例えば

(1) 「あなたの行為は、人の権利を侵害する行為なので、先生は絶対に認めることはできない。でも、先生はあなた自身を否定することはしません。これからも、あなたのことを大切にしていきたいと思っています。」

(2) 「不正な行為は、何故してはいけないのか。人を傷つけることになるからということもあります。しかし、それ以上に、自分に対する誇りを失わせ、自分自身で、自分を価値ある人間として思えなくなるから、してはいけないのです。」という二つの視点をおさえて私は話します。

子どもは「わがまま・甘え」を必要とする存在

西濃サークル 田中秀樹

「わがまま」「甘え」これらのことはもっと以前から論議されるべきだったと思います。それが今頃話題になることがそもそもおかしい。でも遅すぎる訳ではない、みんなで論議しましょう。

私は子どもというのは「わがまま」で「甘え」を必要とする存在なのだという認識を持っています。だからこそ子どもであり、教育される必要がある。わがままでは基本的に受容すべきとの河田さんの指摘は当然なのです。子どもはわがままだから子どもなのですから。

ただそのあたりの受け止め方が大人や教師の側で混乱しているように思います。子どもの「わがまま」を

忌まわしいことのように否定し、子どもに「よい子」を強いる子ども観。児童虐待してしまうのはそのことを認識していないから起こるとも言える。この眼差しが子どもを逃走させる。一方で子どももわがままだと半分分かっているのに、そのわがままな行為そのものを容認してしまうから、子どもはわがままを自ら乗り越えていけないことがあると思う。

河田さんが指摘した、「子どもの権利条約のどこに、子どもには叱られる権利がある、という項目があるのか」とのことです。これは条文でいうと、「学校懲戒」に関する部分であるとも言えますが、適切な表現ではなかったと思います。これはいつだったか、全生研の大会でアムネスティ・インターナショナルのイーデス・ハンソンさんの講演を聴きましたよね。その時に子どもの権利条約を各国の子どもたちが学習し、各条文を自分たちの分かりやすい言葉に書き直したとかいう話の中に出てきました。その中に「子どもには、いけないことをした時には、正しく叱ってもらふ権利がある。」というのがあったと言う話を印象的に私は聞きました。子どもにとっての権利の学習では、これは重要な点だと思った記憶があります。

子どもの権利条約は、子どもの利益を損なわないようにするものであるべき。もちろん大人の判断による勝手な「利益」ではなく。そのためには子どもには正當に「叱ってもらふ」権利がある。当然「子どもの意見表明権」はこの条約の根幹なのだが、それが間違っていれば、あるいは他の利益を損なう恐れがあるものであれば反応し、それを指摘してあげるのが周囲の、特に大人の義務ではないのか。それが子どもの行為に対する大人の「叱る」という行為の重要な部分であると私は考えています。これを私は「壁になり厳しく」といいたいのです。

子どもを指導する場合に「褒めることが大切だ」それは認めますが、所謂「褒め殺し」のように、何でも褒めればよいというような教育の風潮に私は疑念を持っています。「よいとこ見つけ」のようなやり方がもてはやされ、逆に「叱る」という行為は実践記録の前面に出てこなくなった。「褒める」こともやり方によっては非教育的な役割を果たす。「叱る」こともやり方によって子どもを育てることができる。「叱る」ことや子どもが相互に「指摘し合ったり批判し合ったり」することの中にある教育力を探りたい。

河田さんは「子どもには叱られる権利がある、という言い方は危険だ」と言いたいのでしょうか、その危険なことを承知でお私は「子どもは未熟で過ちをする存在だから批判されたり叱られないと成長できない、だから子どもの人格を損なうことのない叱り方の研究をしよう。」と言いたいのです。

以前から言っていることですが、教育とはどんなに美しい言葉で表現しようとも、子どもにとってお節介であり、「傷つく」危険な側面を否応なく持っていると思います。だから他者としての親や教師と子どもが衝突することは避けられない。そうだとすれば、「叱る」ことから大人は逃げてはならないと思います。ただし私は「わがまま」にしても「叱る」にしても一般的な言い方をしているので、共通理解することは難しいでしょうね。正しくは具体的な実践に即して「わがまま」や「叱る」という行為の教育的成立をみていくのが必要だと思います。だから実践記録にそれらを書くといい。前回の中島さんの実践には、それがあったので。

子どもは「未熟者」か「弱者」か

岐阜サークル 河田秀明

秀樹さんの主張は、概ね理解できるのですが、ただ以下の点についてやはり異論があります。

河田さんは「子どもには叱られる権利がある、という言い方は危険だ」と言いたいのでしょうか、その危険なことを承知でお私は「子どもは未熟で過ちをする存在だから批判されたり叱られないと成長できない、だから子どもの人格を損なうことのない叱り方の研究をしよう。」と言いたいのです。

秀樹さんと私の違いは、おそらく「子ども論」における差異にあるのでしょうか。秀樹さんは、子どもを「未

熟(者)」としてとらえているようですが、私はそうとらえていません。私は、しいて言えば、子どもは「弱者」としてとらえています。

子どもを「未熟」としてとらえるのは、大人の傲慢さがそこに潜んでいるように思います。大人だって、未熟です。というより、人間は総じて「未熟」です。ですから、誰もが過ちを犯すのであり、だからこそ、いつまでも学習を必要としながら、成長発達していく生き物だといえるでしょう。(朝鮮やイラクを悪とみなして、軍事的攻撃を辞さないという考えを持つ「大人」が、子どもを「未熟(者)」と言えるのでしょうか。それはさておき、この「子ども＝未熟」論に立つから、秀樹さんは「叱られる権利」ということを主張しているようですが、それはやはり危険だと思います。「子ども＝未熟論」に立脚して過激に論じているのが、あのベストセラーとして売れた「学校崩壊」の著者、河上亮一です。彼は「子どもは未熟であるがゆえに、指導され、管理され、訓練される客体だ」と主張しています。さらに「学校というところは、画一化するところである。子どもを社会化するために一定の文化を組織的に教える場である。生徒は自分からすすんで文化を身につけたいという思うわけではないから、教育は基本的に暴力的なもの・・・」とまで言ってます。

この考えは、秀樹さんが主張するところとは、違っているでしょうが、「子ども＝未熟論」には、上記のような考えが入り込む危険性があると思います。県下の中学校に画一化された「合唱」が広まり、中学生らしい「頭髪、服装」といったことが強制されている現状を考慮するならば、その危険性は理解できるのではないのでしょうか。

お前の行為は許さないが、お前を見捨てない

飛驒サークル 桂川 清

田中先生の言われる「一方で子どもも半分わがままだと分かっているのに、そのわがままな行為そのものを容認してしまうから、子どもはわがままを自ら乗り越えていけないことがある」ということについて、例えば以下のようなことでしょうか。

以前起きた「家庭内暴力・息子殴殺事件」について考えてみたいと思います。お父さんは仕事を犠牲にして、一生懸命子どもに寄り添おうとした。子どもの暴力に無抵抗だったり、言いなりになった。そのことについて高垣氏は次のように書きます。「子どもの暴力への共感ぬきに、ただ子どもを刺激しないように無抵抗でいる、言いなりになるというのは、子どもを本当に受け止めることにはならない。物わがりの良さは相手を対等に扱っているのではない。子どもは物わがりの良さの裏にある、子どもを思うようにしたいという親の気持ちを見抜いてしまいます。子どもは親を殴りながら本当の親を求めていた。必死に無抵抗をつづけるお父さんに「本当の親としてのあんたを見せてほしい」と言いたかったのではないか。」と。

「ほめることと叱ること」が教育的な意味を持つには、河田先生が言われるように「人格を受容し、不正義な行為を否定する」ということが大切だと思います。それは、高垣氏の言葉で言えば「暴力への共感」的な分析を通してということになるのでしょうか。

子どもが「暴力」をふるうわけを他者(親)との関係性の視点で分析してみると、例えば親との支配的な関係の中で、自分を押さえて生きてきたとか、親から幼児期的な「全能感」を十分与えられなかったか、或いは過剰に与えられた中で、自分をうまくコントロールできずに生きてきたなどとなります。

そうした分析のもとでなら、その行為を「断固として壁になって叱る」そして、そうなった背景、つらさを共感的に読み開いていくという方針は、子どもにとって「お前の行為は許さないが、お前を見捨てない。」というメッセージにつながると思います。

先生が言われるように、「具体的な実践に即して」ということが大切だと思います。

壁になり、論争し跳ね返してやる教師や親が必要！

西濃サークル 田中秀樹

桂川さんの高垣氏の引用「子どもの暴力への共感ぬきに、ただ子どもを刺激しないように無抵抗でいる、言いなりになるというのは、子どもを本当に受け止めることにはならない。物わかりの良さは相手を対等に扱っているのではない。子どもは物わかりの良さの裏にある、子どもを思うようにしたいという親の気持ちを見抜いてしまいます。子どもは親を殴りながら本当の親を求めていた。必死に無抵抗をつづけるお父さんに「本当の親としてのあんたを見せてほしい」と言いたかったのではないか。」と。

なるほどと思いました。このような場合の親や教師の苦悩というのは、かなりの程度理解できます。確かに我々は指導を構想し組み立てるに当たって、子どもを理解しようとし、分析をします。これはきわめて重要な指導の一部といってもよい。ただし子どもがなかなか理解できない、何故そのような行為に走るのかの分析ができないというか、一定しない、終わらない、したがって指導方針や具体的な指導構想が立ち上がってこないということがあると思うのです。このような父親の中にも、子どもの荒れ狂う行為の意味が分からず、その行為の裏にある叫びが何であるのかがつかめない、結果として荒れる子どもの前でただ呆然と立ちつくすしかない。

しかし私は待てよと思うのです。理解しきれない、分析しきってからしか指導が発動できないなんてことはない。教師や親は自分も自己の人生のドラマの主役であることを忘れてはならない。とりあえずのやり方でもいいから、自分から仕掛けられたい。仕掛けてみての反応からまた分析して理解できることだってある、と私は思う。桂川さんの言うように、子どもが理解できないがゆえにたじろぎ、指導も管理も出来ず、荒れる子どもの前で立ちつくしているという親や教師が多いのではないかと私は思う。しかし子どもを分析しきってから指導をしようとしても遅すぎる場合がある。だから彼らをただ素通りするのではなく、壁になってやる、ある場合には論争し跳ね返してやる教師や親が必要だと思うのである。その上で自分の分析や理解を修正していけばいい。そのように彼と出会うために退かずに対峙するという姿勢も必要だと思うのである。それは実践的には「叱る」という行為になることもある。河田さんのいう「人格を受容し、行為を否定する」のを、実践の中で具体的に分析し明らかにしていくことが必要だと思う。

河田さんの私の見方との違いを「子ども論～未熟者か弱者か」という捉え、これもなるほどと思いました。いままで自分の子どもに対する見方を検討してこなかったのが、「大人に対して未熟な存在」か「弱い存在」と聞かれると、どうも自覚的ではなかったように思います。だからその認識が実践の中にそのままです。

あえて私の子ども観がどうであるのかを問うてみると、子どもは社会的により弱者であり、それはある意味では「未熟な存在」であるからだと思います。それは指摘の通りです。大人に比べて社会的な経験が少ない、様々な社会的能力も未熟だ。だから傷つきやすく大切に扱わねばならない、社会的に保護されなければならない。そしてそのゆえにその意見表明も権利として尊重される必要がある」私はそう考えています。

そしてそのような認識は大人の傲慢さからきている疑いはあります。しかしそれは弱者と捉えても同じでしょう。弱者だからこそ支配する側が生殺与奪の権限を持っているとして心中を強要する大人もあるのだから。河田さんが例としてあげられた「学級崩壊」の作者の河上某という方は子どもを弱者でもあり未熟な者ともみているのではないのでしょうか。ただ権利行使の主体とみていないのです。それは子ども観の違いと言うより、人間観の違いと言うべきです。この人こそ尊大だと私は思います。

確かに行為としての「相互批判」が水平関係であるのに対して、親や教師の「叱る」という行為は垂直的な、支配と被支配の権力的、管理的な関係と呼び込みやすい、だから私はそれを自戒すべきであると思います。し

かし大人や教師が子ども集団を管理することは避けられないでしょう。それにばかり依存することは危険だが、しかしそれがないと成立し得ない教育の負の部分、それが「教育的管理」であり、「叱る」というこういなのではないか。耳に聞こえの良い言葉で褒める「良いとこみつけ」、それでは教育は成り立たない。子どもと教師や親が互いに言いたいことを言い合って、時にののしりあい、けなし合って「相手のことが少しずつ分かってきた」そういう出会いがあつていいと思う。教師が「叱る」のが指導なら、子どもはそれが理不尽で納得のいかないものなら拒否できる。だから教師は「叱る」ことで自分の思いや願いを子どもにぶつけてみればいい。それを拒否されたら、また分析してみればいい、ただ素通りするよりはるかにいい、私はそう思うのです。

ただやはりこういう管理や叱るという行為も、実践に即してみてもいけないと一般的に言うのはむずかしいですね。桂川さんの言われるとおりです。かつてこのようにぶつような言い方をしました。「戦後民主主義教育は、大袈裟に言えば人間とは何かを問うことをサポタージュしたのではないか。」教育をあまりに抽象的で美しい言葉の下に葬ってしまった、そのつけがとんでもないところに来ている。それを乗り越えるためには、具体的な実践をリアルに分析していく以外にない。

大人こそが問われる — 戦後民主主義はまだ来ない

岐阜サークル 河田秀明

秀樹さんとの論議をやりとりしていくと、同一物の「光と影」を論じているような違いが浮き出て、面白いです。違い(1) 子どもを「未熟(者)」ととらえるか「弱者」ととらえるか。

未熟(者)・・・これは、主として、人をその個体の発達論からとらえたもの。

弱者・・・これは、主として、人間関係における力関係からとらえたもの。

私が、子どもを「未熟(者)」としてとらえないというのは、「未熟者=子どもは、本人が能力を高めていく必要がある=本人の努力義務こそが問われる。」と思えるからです。一方「弱者」としてのとらえかたは、「弱者=子どもが弱者たるゆえんは、強者(大人)が弱者(子ども)に力を与えないでいる、つまり無権利状態にしているからである。つまり、努力義務はそういう関係性をつくりあげている大人こそが問われる」と思うのです。子どもの権利条約は、そうした無権利状態に置かれている子どもの現状に対して、意見表明権を通して、その人間関係の回復を承認したものだと思っています。

違い(2) 戦後の教育について

秀樹さんは、「戦後民主主義教育は、大袈裟に言えば人間とは何かを問うことをサポタージュしたのではないか。教育をあまりに抽象的で美しい言葉の下に葬ってしまった、そのつけがとんでもないところに来ている。」(引用)としています。私は「戦後の民主主義教育というのは、まだ到来していない」と思っています。というか「戦後は、いまだ至らず」と認識しています。現状の教育が、かなり荒廃しているという認識はもっていますが、それは「戦前からの教育のあり方」が相変わらず、その根を張り続けてきたからだと思っています。ですから「教育をあまりに抽象的で美しい言葉の下に葬ってしまった」のではなく、「教育を抽象的で美しい言葉で、葬れないできた。そのつけが来ている」といった方が合っていると思います。

PS. ちょっと、言葉の揚げ足取りをしているように受け取られそうなので、誤解のないように。私は、どちらの考えが良いとか悪いということを論じているわけではありません。秀樹さんと私の認識は、上記のように違いがあると思いますが、教育実践の方法論としては、おそらく違いよりも同一性の方が多いと思います。これは、今までのお互いの実践記録を読んだり、他の人の実践分析をしていくなかで私が感じてきたことです。が…。同じ研究団体に長年付き合ってきたのですが、このような認識の違いに気づき、面白いもんだと思っています。

子どもは先生に従うのが当然！？

飛騨サークル 青木光久

河田先生と田中先生の話を書いて、自分はどちらかという、田中先生のようなとらえかたをしているなと思います。「先生の方が偉くて、子どもは先生に従うべきもの」という思いを、心の底にもっていると思うからです。

西濃サークル 田中秀樹

青木さんへ。教師としての自分と子どもとの、関係性を「先生の方が偉くて、子どもは先生に従うべきもの」という思いを心の底にもっている自分、それを自覚して実践すればよいのではないのでしょうか。教師には子どもに対して管理責任があります。危ない行為があれば、「やめろ！」と叫ぶ、止めさせる義務がある。そしてその後で「あんなことをしたらあぶないじゃないか。」と「叱る」という行為になる。ただこれは別に子どもに限ったことではない。子どもは無邪気に危ないことをしてしまうから、「叱る」という行為で教えてやればいいが、大人は意図的にやるから始末が悪い。

でも「子どもは先生に従うべきもの」だと相手の子どもの考え方がどうかという、子どもの側の考え方に左右される。だから「子どもは教師に従うべきだ」というよりも、「子どもが従いたくなるような教師のモノの言い方」を研究する方が子どもに任せなくていいぶん、手っ取り早いと思いませんか？

私は例えば教師として子どもを親から一定時間預かるなら、危ないことをしていたら止められないといけな、もっと言えば止められるような声の発生が出来ないとプロとしては恥ずかしいと考えています。かつて身体表現の研修を職場でやっている時、服部潔さんに聞いたことがあります。叱るには叱る声、褒めるには褒める声の出し方がある。危ない時に子どもの動きを止められる叫び方がある。子どもの体内にその声が届くような発声をプロであればできなければいけない。できない、不十分であれば練習する必要がある。危ない時の怒鳴り方、あるテーマに即して子どもを説得する場合の言い方のレッスンなど、合宿研で教師の身体表現の実演とかやってみると若い教師は学べると思う。青木さんは校舎のベランダで綱渡りのような危ないことをしている生徒に出くわした時、どのようにいいますか？何か叫んで止めようとした時、止められる自信はありますか？その叫び方の原則とはナンでしょうか？

子どもは大人以上に未熟で弱い存在です。だから傲慢な部分も大人のように巧妙にカムフラージュできずに、あからさまに表現します。子どもの権利条約は「何も恐れずに素直に自分の意見や思い、願いや不満・要求を表現しようと勧めています。意見を表現したら、時には「それは他の人が困るからわがままじゃないのかな」といわれることもあるかもしれないが、人間はそうして他者の思いが理解できるようになるのです。だから安心してわがまをいみましょうね。」このような応答も必要でしょう。そのような批判的な応答も、この条約は必要としていると私は考えているのです。

無自覚に「先生が上で子どもが下」という権力的な関係を常態的に実践している大人や教師の「やめろ！」は、子どもは自己の否定としかみない、したがって「叱る」という行為が成立しなくなるのではないかと。そういう意味でも私は「叱る」という行為に興味がある、研究したいと思っているのです。

自己の内部に権力的な部分があるからといって、自信を失ったり自己否定する必要はない。現代というある意味で力こそ正義だと言わんばかりの時代にドブプリと浸かって生きている我々は、その影響を受けずには生きられない。逆に言えば、その影響を受けながらなおそれを対象化し、自覚・自戒しながら生きる大人こそ、「力の時代」に強く生きることを強いられた子どもたちの「生きにくさ」に共感しながら共に生きようと励ますことが出来るのではないかと、私は思い続けてきました。だから「子どもは弱者だ」という河田さんの認識

には少なくとも賛成です。しかし同時に「弱いままでもいいんだよ。」自分も弱い教師として生きる。しかしそれに対する自戒はすべきである、だからこそ私は岐阜生研、全生研に関わり続けているのです。世の中と子どもは変化し続けるのに対して教師としての自分は未熟であり、発展途上である、過ち多き人間であるから。

子どもは弱者・・・でも掃除ができないクラスは、どうすれば・・・

岐阜サークル 井深

今、岐阜市に戻っていきなり中3を担任していますが、学校全体の規模が小さいということ（学年3×3+いぶき学級=10学級）が、どんなに条件のいいことかを実感しています。事務的な仕事が少なくなり、年末もこれまでで一番まともに大掃除をすることができました。ただ、相変わらず未熟者の私は、2学期の終わりには、教室（特に給食時間と掃除時間）に居ることが辛くて、逃げ出しそうな気持ちでいました。担任としての私の目の前にある現実から目をそむけたいことが毎日続いて、息苦しくなったのです。

さて、論議の件ですが、正直に言って、私は子どもを「弱者」ととらえようとしています。全生研で学び、イメージとして子どもをそのようにとらえることはしていると（自分で）思います。「弱者」ととらえようとしながら、「未熟者」としてしか受けとめられず、自分の要求にかなわない（生徒の）姿に満足できず、腹を立てたり、怒りをぶついたりしてしまいます。

宮本誠貴さんが岐阜で講座をされた時、『生活指導』とは、その子を取り巻く環境に働きかける」というように言われ、そのとらえ方がとてもわかりやすかったのを覚えています。そのとらえ方で子どもに接していると、自分自身の教師としての生き方が肯定できるような気がします。でも、そのとらえ方で子どもに接していると、実践に非常な手間と時間がかかります。子どもの様子が（きっと私自身の思うように）変わらないことにあせり、子どもを未熟者としか思えず（とらえられず）、変わってこないことに苛立ち、怒りをあらわにすることで、子どもに圧力をかけている自分に気づきます。

うまくは書けませんが、例えば掃除時間のことを率直に書くと、私のクラスは、普段は掃除ができません。もしかするとこの「できません」というとらえ方も、私の要求にかないませんということかも知れないのですが、掃除時間に学級の生徒が掃除していないことに（掃除できるように実践できていないことに）何もできず、できない姿を見ていることが苦痛で仕方がないのです。だから、2学期の最後には、まわりの様子を何も見ないようにして、教室の掃き掃除をしたり、掃除時間中に更衣室に逃げ込んだりしていました。3年生の他のある学級では、担任（この人は、部活動で非常に成果を上げ、学校のいろんなことに影響力を持つ）の力（圧力）で、生徒は（表面的に？）よく掃除をします。（書くことが苦手で、書いているうちにわけがわからなくなるのですが・・・）

つまり、力で（圧力をかけて）掃除をさせてしまうことは楽でいいなあ、と感じている自分がある。もっと「掃除はこのようにやろう！とか、みんなで納得したり、みんなでちゃんと話し合っちゃんと掃除をしよう！」などと言いたい、そんな子どもにしたいという理想だけを抱いて、ほとんど何もできない自分がいやでしようがない。毎日ある掃除時間に、理想ばかり描いて、掃除ができない生徒の姿が目の前にあることをどうすることもできず、ただ苦しんでいる自分・・・。

今回の論議を聞き（読み）ながら、自分の学級の掃除時間を思い浮かべました。て子どもを「弱者」としてとらえ、自分の実践力のなさとして感じているためにできなくてもしようがないと自分に言い聞かせながらも、子どもは「未熟者」だからもっと圧力をかけて、「やらせなくては」とか「やらせた方がずっと楽だ」とか考えている自分もある・・・。やっぱり、何を書いているのかわからなくなりました。勇気を出して書いてみた私の言いたいこと、伝えたいことを、だれか整理してもらえないでしょうか。

君たち。先生が見ているときぐらいは掃除を真面目にやっているフリぐらいできないの。

岐阜サークル 河田秀明

井深さんのアップに対して誰か答えないかなあと期待していましたが、なかなかアップされそうにないので、とりあえずレスしておきます。と言っても、私は掃除について真面目に指導したことがないので、どう答えたらよいか困っているのです。とりあえず、以下の井深さんの揺れている部分について書きます。

>子どもを「弱者」としてとらえ、自分の実践力のなさとして感じているためにできなくてもしょうがないと自分に言い聞かせながらも、子どもは「未熟者」だからもっと圧力をかけて、「やらせな>くては」とか「やらせた方がずっと楽だ」とか考えている自分もいる・・・。

「圧力をかけて子どもにやらせていく方がずっと楽だ」という思いは分からないわけではないですが、それで子どもは何を学んでいくのでしょうか。結果として教師が思うような姿を子どもが見せるようになったとしても、子どもは「力の強いものには従う」ということを学んでいくということです。教育は、結果が良いのではなく、その結果に至る過程までの中で何を教え、何を学んだのかということが大切なのではないのでしょうか。そんなことは、井深さんも分かっていると思いますが・・・。

掃除をやらせることの教育的な意味は私は分かりませんが、掃除をやらない子どもたちの姿がそんなに気になるなら「なあ、君たち。先生が見ているときぐらいは掃除を真面目にやっているフリぐらいできないの。それぐらいのしたたかさや、処世術を身に付けておかないと、この厳しい世の中を渡っていけないよ。」ということくらい言ってみたらどうでしょうか。

河田さん、さっそくの返信を、ありがとうございます。少しほっとしました。河田さんが書いている言葉に近い言葉を発することができるような構えが、今の自分自身の中にできてきたことは、自分でもわかっているつもりです。でも、ずーっと以前に、伊藤美智夫さんから、「河田さんは、職員室のソファでたばこ吸ってても、河田さんの学級の子もは、一番掃除をしっかりとやるんやぞ!」ということ聞いた覚えがあって、なんか、そんな姿（イメージ）がこびりついているのも事実です。

これまで、中学校に7年半勤務していますが、どの学校でも、「三本柱」と称して子ども達に頑張らせている状況でした。現在の学校は「黙働掃除」（私語をせずに掃除をする）ということを生徒会が中心となって取り組んでいます。これまでは、掃除ではなく動くだけで「黙働」と言われてきたのですが、昨年度、美化委員会が取り組みをし、「黙働」にすることができました。

しかし、昨年の取り組みを知っている2・3年生はその精神が身につけているのですが、一年生はそうはいきません。注意はしますが、その場だけ静かにする程度です。一年生全てがそうなのではなく、特に女子の活発な子（普段でもおしゃべりな子）がなかなか黙ってやらない。黙る黙らないは別にして、掃除をやっているのかと言えば、しゃべることに集中し、手が動いてない。この場合、掃除をしてないことが残念に思っています。2・3年生の美化委員がそれを見とがめて、先生以上に気にしているのが現状です。

説明が長々となりましたが、僕の場合は、学級活動の話し合いで、黙働清掃の伝統を作ってきた歴史を説明し、あなた達はどう思うか？ どういう価値を見いだすか？ →自分たちはこれからどうするか？ という感じで指導をすると思います。

しかし個人的な思いとしては、黙ってやることに価値を見いだしていなくて、きれいになる掃除をしなければ意味がないと思っています。だから、雑巾を洗わなかったり、いい加減に洗って雑巾かけにかけたりすることが気になりますし、ほうきの掃き方、雑巾かけの仕方が雑なことを指導したいと思っています。

参考にはならないかもしれませんが、一応書かせてもらいました。